

広葉樹利用の新たな可能性に向けた取組について

静岡県東部農林事務所 鈴嶋 康子

1 静岡の木材産業

静岡県の林業・木材産業は、スギやヒノキの生産が主流で、建築用材や合板、バイオマスのチップ用などに生産されます。その伐採作業の中で、広葉樹が伐採されることがあります。広葉樹は、チップ用材のほか、伊豆などの地域においては、しいたけ生産用のホダ木にすることもあります。また、わずかですが、大径の広葉樹は市場に出荷され、家具や木工用材として取引されることもあります。

2 静岡の家具産業の現状

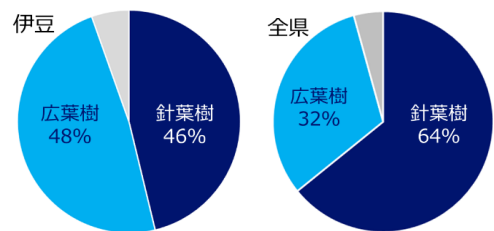
静岡県は、徳川家康の時代、静岡浅間神社造営のために木工職人が全国から集められた流れで、家具の一大産地へと発展しました。そのため、家具のつくり手が集積しており、家具向けの製材ができる工場も複数あります。家具づくりは、家具の種類や使い手の需要に合わせて、木の特性や木目を活かしてつくるので、様々な樹種や地域の木材を取り扱ってきました。

しかし今では、かつて藤枝にあった広葉樹市場も無くなり、家具に主に利用される広葉樹の地域産材の流通は、小規模な個別取引のみです。家具のつくり手、家具向けに材が挽ける製材工場、多様な森林資源と3拍子揃っているにも関わらず、家具に地域の木材を使う流れがほとんどありません。

3 豊富な広葉樹資源がある東部管内の状況

東部農林事務所が管轄する伊豆地域では、森林面積の約5割が広葉樹です。生産林としての広葉樹は無く、スギやヒノキの森林整備と併せて伐採された広葉樹のうち、大径のものは市場へ出荷することもあります。タイミングが不定期なので買い手が付きづらいです。そのため、この豊富な広葉樹資源の積極的な利活用が、伊豆地域の課題の一つと言えます。

広葉樹はまとめてチップ工場に搬出することが多いですが、適材適所を見極め、それぞれの広葉樹が持つ特性に合わせて使うことができれば、材の需要の幅を広げ、より有効に活用する方法があるのではないかと考えました。



グラフ 針広葉樹別の面積割合

4 みちかな木を活かす道のり

令和元年に、私が商工業局地域産業課で家具産業振興の担当となると、静岡大学の横田准教授や、静岡の家具のつくり手、そして山を守るきこりから、地域の木をもっと活かしたい、という意気込みをぶつけられました。横田准教授は、地域産業の連携による価値づくりなどを研究し、静岡大学に来る前は、北海道の旭川において、当時未利用材であった白樺を活用するプロジェクトに取り組んでいました。

横田准教授とともに、地域材の活用に興味がありそうな家具のつくり手や、広葉樹を扱う製材所、広葉樹の活用に前向きな素材生産者、地域に根差したデザイナーなどを訪問し、何度も話し合いを重ねる中で、現状における課題や地域材を使う意



写真1 家具工房へケヤキ板材の搬入

義、地域材を使っていくための組織体制、流通のスキーム等を整理し、共通認識を図るとともに、コンセプトへの落とし込みやロゴマークの制作などを行いました。

5 「ヨキカグ」の立ち上げ

地域の広葉樹をもっと活かしたい想いのある林業、製材、家具、デザイン、プランナー、静岡大学、及び県がひとつとなり、地域材を活用する「ヨキカグ・プロジェクト」を立ち上げました。ヨキカグという言葉は、昔木の伐採に使っていた斧で「自然への敬意を表す地水火風の四つの気」を表す四本の溝を刻んだ「ヨキ」、そして、みずかな木の良さを最大限に活かした良き家具をつくり、つなげていこうということから来ています。

地域材を活用するためには、木を伐るところから加工まで木材の流れのしくみを整え、地域材を使う土壌を育てる必要があります。今まで使われてこなかった樹種の材も、このプロジェクトをきっかけにまずは使ってみると、有用なものが見つかり、受け皿の幅を広げられるかもしれません。



写真3 神社内で倒木したカエデの伐採前のお清め

素材生産者にも、広葉樹の需要を認知してもらう必要があります。

そして、顔の見えるつながりをつくるとともに、木のもつストーリーを発信し伝えることで、森と人、人と人とのつながりをつくります。そうすることで、木を伐るところから使い手までがつながり、そのストーリーやモノの価値を循環させていくことができれば、地域の豊かな森づくりと、豊かな暮らしをつくることにつながる、と考えます。



写真2 ヨキカグリーフレット

6 地域材活用の実績

ヨキカグの取組のPRに使用する「木々スツール」は、木目や陰影が美しく、木それぞれの個性と魅力を伝えるために開発しました。神社で倒れてしまったカエデや、工事の都合で伐られることになったケヤキなど、様々な樹種やストーリーの木から製作しています。県庁のロビーで展示した際には、来庁者は、見た目や肌触り、重さなど、一つ一つの違いに驚き、自然と自分の好きな木を見つけたようでした。

静岡大学とコラボし、演習林内の自生している早生樹を活用する取組では、在来の早生樹が家具や木工製品にどのように活用できるかを試みた、実験的な取組となりました。大学という施設をフル活用し、材



写真5 静岡大学演習林内の早生樹（左）とその家具（右）

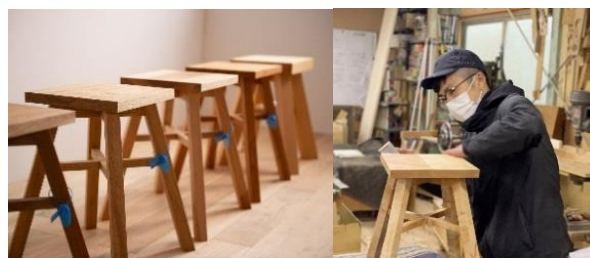


写真4 木々スツールの製作

の強度試験や、樹種ごとのデータを集め始めたところでは、関わった家具のつくり手の間では、これをきっかけに、カラスザンショウがブームとなり、少し青黒っぽい渋目の色合いがよい雰囲気を出しています。

この他にも、ヨキカグが材の調達や製作に関わり、少しずつ実績を増やしています。



ビャクシン
静岡市内の神社の御神木

コナラ
静岡市内中学校敷地内

トウカエデ
静岡市東区麻績道水池



ケヤキ
静岡県総合庁舎敷地内



アカタブ
静岡市内お寺裏



デイゴ
静岡市内中学校敷地内

集材実績（抜粋）



匠宿キッズ工房と森 遊具
静岡市産 ヒノキ、杉など



富士山静岡空港 空のしおり 什器
静岡市産 桜、ケヤキ、くり



HUG COFFEE テーブル
静岡市産 シイノキ 山桜



岐阜 Y 様邸 円卓
静岡市東区横沢山崎、施主自らが伐採した材



静岡大学研究室 MTG テーブル
県産ヤマザクラ（曲がり材）



支障木のトレー
静岡市産 支障木のカシ

納品実績（抜粋）

7 東部地域への拡大と発信

令和3年度に私は東部農林事務所に赴任し、広葉樹が豊富な伊豆地域でもっと広葉樹を活かしていく流れをつくろうと、林業経営体の方々に働きかけました。

（株）天城農林（伊豆市）は、自分たちが伐った広葉樹を有効に活用してほしいという想いがあり、販路を増やす意味でもプラスになるからと、ヨキカグへの広葉樹の搬出につながりました。

（株）天城農林の申し出で、人とのつながりをつくりたいからと、製材所まで丸太を直に搬入しました。搬入時には、広葉樹の製材所で扱われる丸太を実際に目にするのと併せ、川中・川下にいる人たちと話すことができ、材を搬出した先を意識するようになったそうです。また、家具のづくり手にとっても、材を伐った人と直にコミュニケーションをとる機会となるとともに、普段家具にはあまり使われない珍しい材も運ばれてきて、未知の素材の開拓と挑戦の機会となりました。

戸田森林組合（沼津市）は、資源の有効活用と、地元の森林・林業の活性化やPRになればと、直径80cmもある大きなケヤキを搬出してくれました。ケヤキは皆伐現場の斜面下方に立っており、とても重量がありましたが、タワーヤードでどうにか土場まで出してくれました。材はすぐに製材工場に運ばれ、板に製材しました。



写真7 戸田森林組合によるケヤキ伐採(上)
板に製材(下左)、所長室ミーティングテーブル(下右)



写真6 株式会社天城農林

この挽いたばかりの丸太を、沼津市役所と東部総合庁舎に展示しました（主催：地域産業課）。挽きたてで香りもよく、ほんのり湿っているケヤキの板は「木が生きていることを実感できる」と、来訪者に好評でした。

また、このケヤキを使い、当事務所の所長室のミーティングテーブルを製作してもらいました。和風のイメージのあるケヤキにしては柔らかな色合いで、あたたかな空間をつくっています。後日、伐採をした森林組合や家具のづくり手に集まいただき、テーブルを囲んでの茶話会を企画しています。



写真8 きのこ総合センターの地域材家具

また、地域材の新たな価値の普及と伊豆地域のしいたけ産業のPRを兼ねて、紅葉の季節限定で、県のきのこ総合センターという施設でカフェをオープンしました。

伊豆のしいたけ料理を、地域材の家具に座って味わってもらうことで、来訪者にしいたけと、しいたけの育つ山とをまるごと体感していただきました。

8 みちかな木を使うということ

みちかな木を使うことで木材の新たな流れが生まれ、販路を多角化させるとともに、物理的に距離が近い、顔の見える相手と取引できることは、大きな強みです。つくり手も、今まで扱ってこなかった未利用材などにも挑戦することで、受け皿を広げ、扱える木材の幅を増やすことと併せ、その材を有効に使える人のところにつないでいくことができれば、今まで使えないと思い込んできた材は、実はとても良質な材かもしれません。しかし、その良質な材に気付くには、川上から川下まで、その流れに携わる人たちが連携し、広葉樹や未利用材を使う大きな流れをつくることで、初めてできることです。

「良質な材」は最初からあるものではなく、山から搬出し、特性に合わせて「使う」ことで、その木材や製品に価値が生まれ、良質な材と呼ばれるようになります。「価値を高める」とよく言いますが、木それぞれの持つ特性や個性を引き出し、更に、その引き出した個性と背景にあるストーリーを伝えることができて、初めて価値になります。

そうすることで、素材生産者にとっては、販路の多角化によるリスク分散や、スムーズで余すところのない材の取引、そして目先に惑わされない、長いスパンでの林業経営や森づくりにつながります。

木を使ったものづくりをする者にとっては、近場で顔の見える相手との取引によるリスクの低下や、木の持つストーリーを伝えられることによる製品の価値の向上につながります。

使い手にとっては、ストーリーが見えることで、価値を納得した上で製品を購入できることや、生産者の顔が見えていることで、何かあれば対応してくれる人がそばにいる安全・安心、そして、山からここまでたくさんの人の手を経てつながってきた家具が暮らしの身近にある、ということによる、暮らしの充実や豊かさにつながります。

木や森、関連する仕事に興味を持つきっかけや、木っていいなと思うには、まずは暮らしの中で、みちかな山の、木を伐った人、家具をつくった人が実感でき、それがいつも手に触れるところにあることから始まるのだと思います。

木材需要が変化する時代の中で、みちかにある木を活用していくことは、時代に合わせた柔軟でバランスのとれた林業や関連産業の発展と、未来につながる持続的な森づくり、そして豊かな暮らしにつながると考えています。

大切なのは、「みちかな木の家具が持つ特別な価値」というものが何かを、作り手と使い手が一緒に考え続けることです。

表 みちかな木を活用することの利点

区 分	利 点
素材 生産者	販路の多角化によるリスクの分散 信頼の元でのスムーズで余すところのない材の取引
家具の つくり手	近場で顔の見える取引によるリスクの低下 トレーサビリティの明確化による価値の向上
使い手	顔の見える相手からの購入による安心・安全 みちかな木がそばにあることでの暮らしの質の向上



写真9 ヨキカグメンバー集合